

2018年11月30日（金）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 梁亜旋さんWS 卷子本を扱う

1,2 回目のご来館

梁亜旋^{りょうあせん}さんはこれまでのワークショップを通じて、特にひっそりと受け継がれるべき大切な事柄を記す「卷子本^{かんすぼん} (=巻物)」という形式の書物に惹かれたそうです。

そこで今回は、複製本を用いて卷子本の扱い方を一緒に学びました。



2, 卷子本という形態

卷子本は冊子形態の書物とは違い、右から左へと少しずつ順番に見てゆくことしかできません。冊子本ならば好きな箇所を何度でも見返したり、いきなり最後のページを確認することが可能ですが、卷子本は不可能です。

書物の最後（奥）には、作品の成立や書写者、出版者に関する情報や、伝来についての情報が記されているものがあります。卷子本は、ひととおひらいた後でなければ、その部分に到達できないのです。

この情報は大変大切なものであり、書物の価値そのものと直結している場合もあります。卷子本は奥書を確認するには不便ではありますが、そのような情報を簡単に見ることのできない場所に記し、守るという意味では大変適した形態といえるのです。こういった不便な形態が残り続けるのは、日本特有の文化なのだそうです。

また、絵巻などは大ぜいで周りを取り囲み、少しずつ場面を進めながら一緒に鑑賞することが可能です。

書物の形態の違いは、中に記されている情報の価値や内容、どのように鑑賞されるべきものなのかという需要の在り方と深く関わっているのです。

3, 卷子本を扱うときの決まりごと

卷子本でも冊子本でも、他にかわりがない貴重な資料ですので、

2018年11月30日（金）

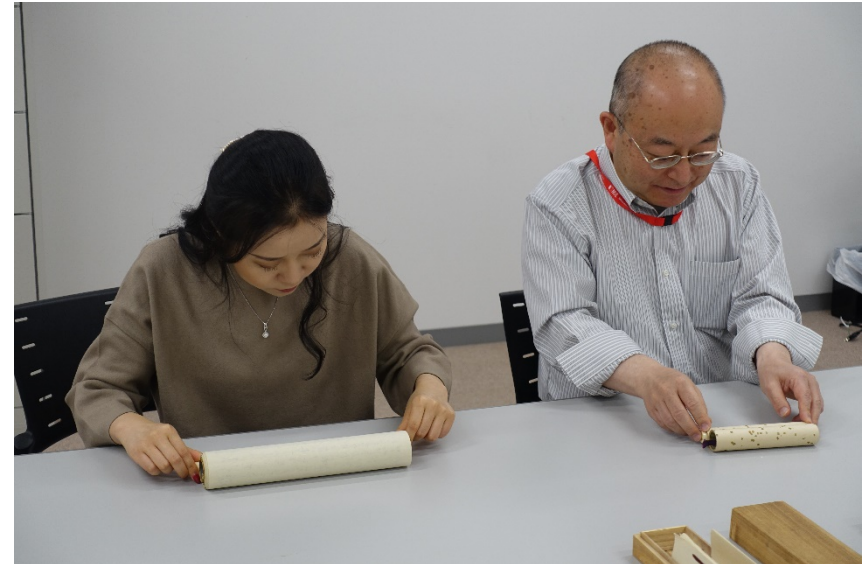
触れる時には決まりごとがたくさんあるのですが、もっとも大切なことは「傷つけない」、「元通りになおす」ことです。その基本がわかれば、すべての手順に意味があることがわかります。入口先生と一緒に、複製本を使ってひとつずつ手順を確認してゆきました。

古典籍を扱う際には、手を綺麗に洗って指輪や時計といった手のまわりの装飾物を外し、資料に落ち掛かる可能性のある長いスカーフやネックレス、名札なども外します。机は清潔にし、水気（コップなど）や資料を汚す可能性のある筆記用具（鉛筆のみ使用できます）などがない状態にします。

元通りになおすために、最初の状態をよく観察することを忘れてはいけません。

卷子本の場合、一度にそれほど多くの部分を広げません。左側へ向かい肩幅程度に新しい部分を出し、見終わったら巻き取り、新しい部分を開く、という動作を繰り返します。この時、文字や絵が書かれている場所（本紙）に手を触れたり、紙同士の摩擦で本紙が傷付いたりしないように気を付けます。また、巻き戻す時に備えて、巻き取った部分が斜めにずれてゆかないように、できるだけ指の感覚を捉えて真っすぐに扱うよう心がけます。

梁さんは緊張の面持ちでしたが、素晴らしい集中力を発揮して入口先生のお手本を観察し、とても上手に扱っておられました。最後に紐を掛けて箱に戻す工程まで、綺麗に仕上げてもらいました。





4, 軸装本を壁に掛ける

軸装本（書や絵画を表装して壁に掛けられるようにしたもの）を壁に掛ける動きも試してみました。

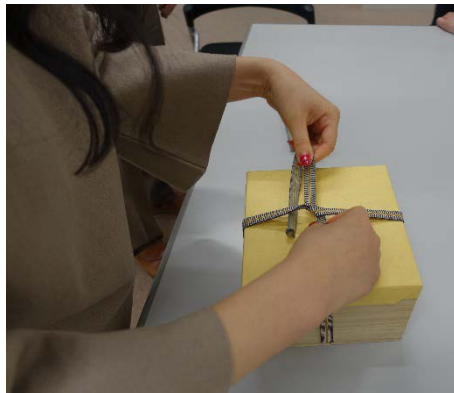
軸装本は、^{ふうたい}風袋などが加わる場合がありますが、基本的に卷子本の扱いと同じということで、応用編です。

壁の高い位置に掛ける時には、「^{やはず}矢筈」という道具をつかい、絵や文字が書かれた本紙の部分に触ったり弛ませたりしないように気を付けます。机の上で広げるのではないため、出来るだけ空中での作業を避けるように、矢筈を渡すなど手助けをしてくれる人と二人組で行うと安心です。

梁さんは基本を守って美しく掛けることができ、巻き戻しも素晴らしい出来映えでした。「難しかったです」とおっしゃっていましたが、さすがの手際です。

もう一つ応用ということで、箱に紐をかける練習もしてみました。卷子本に掛ける際にも、箱に掛ける際にも、ほどくときに一度で済むように結ぶのがポイントです。なるべく触る回数を少なくするのも、基本の「資料を傷つけない、劣化させない」という方針に基づいて考えられていることなのです。

2018年11月30日（金）



5、「祈りと救いの中世」見学

そしてこの日は、国文研の展示室にて開催中の特別展「祈りと救いの中世」（2018年10月15日～平成30年12月15日）の見学もしていただきました。

案内されたのは、中世末期・近世初期の日本の語り物文芸を研究しておられる糸汐里先生（当館特任助教）です。この展示は、宗教と文芸という大きなテーマに取り組んだもので、様々な目的、用途のためにつくられた貴重な卷子本が多く出品されています。

梁さんは、死後の世界を描いた「勸心熊野十界図」のストーリー一性が面白いと感じられたようでした。

